

井辺八幡山古墳の再検討

— 造り出し埴輪群の配置復原を中心に —

佐藤 純一・清水 邦彦・関 真一
辻川 哲朗・松田 度

はじめに

井辺八幡山古墳は和歌山県和歌山市井辺字八幡山に所在する。1969年に和歌山市の委嘱を受け、同志社大学文学部考古学研究室が墳丘測量調査と造り出し部分を中心とした発掘調査を実施した。その結果は、1972年に調査報告書『井辺八幡山古墳』（以下、『報告書』と略称する）にまとめられた（森他 1972）。『報告書』刊行後は、和歌山市指定文化財となっている人物埴輪（力士）1体を除いて、出土資料のすべてが同志社大学歴史資料館に保管され、その一部が常設展示されている⁽¹⁾。

後章において詳述するように、近年の埴輪研究では、大型古墳に立て並べられた形象埴輪群を中心として、その配置構造の分析と配置原理の解釈に関する研究が進められている。それらのなかで井辺八幡山古墳は数少ない西日本における形象埴輪配置例として言及されてきた。とはいえ、すでに『報告書』刊行後 35 年を経過し、その間に西日本においても形象埴輪の配置例が確実に増加しつつあることから、それらとの比較検討により井辺八幡山古墳例をあらためて位置づけし直す必要があると考える。そのためには、井辺八幡山古墳の埴輪を中心とする資料群について、『報告書』によって知りうる調査当時の認識をふまえたうえで、現在のわれわれの視点でもう一度それらを見直してみようという基礎的な作業が重要であると考えているにいたった。

本報告は、以上の問題意識をもって、2006年2月から2007年7月までの間に実施した14回におよぶ検討会（井辺八幡山古墳検討会）をとおして検討した結果をまとめたものである。検討会の参加者は以下のとおりである。また、本報告は参加者で議論したうえで分担執筆したものであり、すべての文章は検討会の総意に基づくものである。なお執筆分担は文中に示した。（辻川・松田）

【井辺八幡山古墳検討会参加者】*：本報告執筆者

辻川哲朗*（財団法人滋賀県文化財保護協会）・松田 度*（奈良県大淀町教育委員会）

関 真一*（財団法人大阪府文化財センター）・佐藤純一（和歌山県白浜町教育委員会）

清水邦彦*（同志社大学大学院文学研究科博士課程前期課程）

1. 古墳の立地と墳丘構造

1.1 古墳の立地（図1）

岩橋千塚古墳群 和歌山県の北端、県下最大の流域面積を誇る紀ノ川河口南岸に、後期古墳群として広く知られている特別史跡・岩橋千塚古墳群がある。この岩橋千塚古墳群が所在する岩橋山塊からは、和歌山市市街地を含む紀ノ川下流域の広大な沖積平野を一望することができる。岩橋千塚古墳群は総数700基におよぶ多数の古墳から構成されるが、分布状況から大きく11地区（岩橋前山A～C・

大日山・大谷山・寺内・井辺・和佐・山東・花山・井辺前山) に区分されることが多い。このなかで井辺八幡山古墳は、約 40 基の古墳から構成される井辺前山地区に含まれることになる。井辺前山地区は福飯ヶ峰を最高地点 (標高 101 m) とした小山塊にある。この小山塊は一見すると独立丘陵状を呈するが、実際には北東部の凹地を経て岩橋山塊に連なっている。

井辺八幡山古墳周辺の立地 1969 年の同志社大学考古学研究室による発掘調査時には、井辺八幡山古墳の墳丘にみかん畑による開墾が及んでいた。しかし、みかん畑はその後に放置され、我々が現地踏査を行った 2006 年 5 月の段階では、古墳周辺は雑木林に覆われ、墳丘上に立っても眼前に広がっているはずの平野部を望むことはできなかった。また、この古墳の東西両側には谷が入り込み、周囲から画されている。そのため、群集墳中にありながらも独立墳の印象を受ける。このように、現状では北側への視界は遮蔽されているものの、築造当时には平野部から、福飯ヶ峰と井辺八幡山古墳を視認することは十分可能であったと考える。



図 1 岩橋千塚古墳群 井辺前山地区

1. 2 墳丘の構造 (図 2)

墳形・規模 『報告書』では、地形測量結果などから、井辺八幡山古墳は全長約 88 m・後円部径約 45 m・前方部幅約 57 m をはかり、前方部を北西に向け、東西両造り出しを有する三段築成の前方後円墳とされている。また、墳丘各段の平坦面には円筒埴輪列が一重にめぐる⁽²⁾が、葺石や周濠は存在しないと報告されている。

構築の方法 発掘調査の結果からは、この古墳は主として結晶片岩からなる岩盤を利用して構築されていることが判明している。つまり、岩盤を削り出し、また部分的に盛土を行うことで墳丘を構築しているのである。それは造り出し部においても同様であるが、西造り出しの一部には岩盤が露頭し、直接そこを穿って須恵器大甕や埴輪類を設置している部分が認められた。

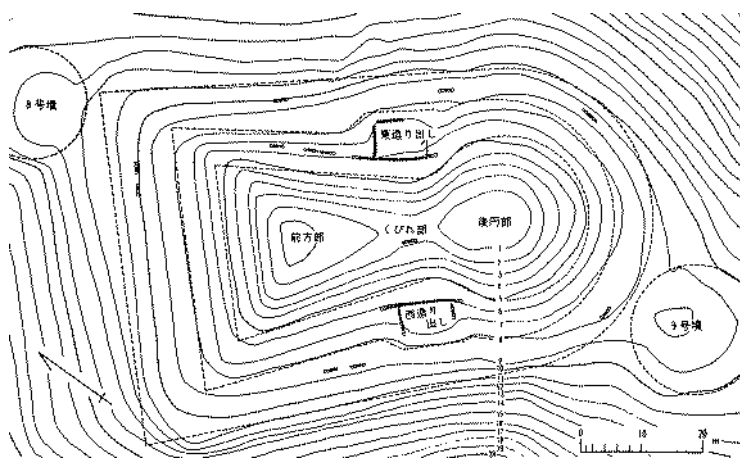


図 2 墳丘復原図

こうした造り出しのあり方は、近年発掘調査が実施された岩橋千塚古墳群大日地区の大日山35号墳においても確認されている（藤井2005）。

2. 井辺八幡山古墳をめぐる研究史抄

2.1 井辺八幡山古墳をめぐる研究視点

二つの視点 1972年の『報告書』刊行以降、古墳時代研究において井辺八幡山古墳がどのように扱われ、また評価されてきたのか、それを概観することによって、井辺八幡山古墳を再検討する必要性が自ずと明らかになるとと思われる。以下においては、井辺八幡山古墳を軸として、①和歌山県における古墳研究のなかでの井辺八幡山古墳の位置づけ、②埴輪研究のなかでの井辺八幡山古墳の位置づけ、という二つの視点から見ていくことにしたい。

2.2 和歌山県における古墳研究と井辺八幡山古墳

従来の研究方向 井辺八幡山古墳が位置する地域（和歌山県）のなかで、どのような存在として認識されてきたのかという点についてみてみよう。

そのために和歌山県における古墳研究を以下の四つの視点に分けて整理した。

- ①地域研究 紀ノ川流域の古墳を対象とし、古墳時代における対外関係を視野に渡来系集団や文献史料での「紀氏」との関係を検討する視点（河上1975、菅谷1976、千賀1985等）。
- ②横穴式石室の分析 紀ノ川下流域に主たる分布域をもついわゆる「岩橋型」横穴式石室の変遷や築造方法などを明らかにする視点（前田1993、黒石1990・2003、大野1985・1997、中司2003等）。
- ③後期群集墳の分析 岩橋千塚古墳群をはじめ、紀ノ川を望む周辺の諸古墳群について、各古墳の埋葬施設の様相に着目して検討をおこなう視点（大野1971、吉田1979、松田1979、松下1988、川口2004等）。一墳丘複数埋葬施設例を対象として、当時の家族構成を復原する方向性もある。
- ④埴輪研究 和歌山県下の埴輪研究は、紀ノ川北岸の「淡輪技法」で製作された埴輪について言及されてきたほか、「紀伊型埴輪」の設定とその様相の究明、さらに関東地域の埴輪との関連性の有無に関する指摘など、様々な局面からの検討が試みられている（坂・穂積1987、河内1987・1988・2001・2002・2003、若松2002、藤藪2002・2003・2006等）。ただ、円筒埴輪に関する研究が主体を占め、形象埴輪に関しては多いとはいえない。

以上にあげた四つの方向性のうち、①・②・③は伝統的に和歌山県下の古墳研究の中心をなしている。とくに③は埋葬施設である横穴式石室を分析し、さらにその成果を発展させた結果、②とは厳密に区分しがたい論もある（川口2004等）。

従来の位置づけ このような中で、井辺八幡山古墳はいかなる評価が与えられてきたのであろうか。井辺八幡山古墳の埋葬施設は確認されていないので、上記②の研究対象とはならず、横穴式石室の点からは他の古墳との相対的な時間的位置付けはなしえない。その一方で、その墳丘規模から岩橋千塚古墳群内の盟主墳の一つという認識は示されていた（中村1997等）。築造時期についてもおおむね6世紀前半と考えられており、『報告書』での位置づけがそのまま踏襲されている。

墳丘規模に関する認識 このように岩橋千塚古墳群内でも屈指の規模を誇り、和歌山県下最大規模の前方後円墳で6世紀前半の盟主墳の一つと考えられてきた井辺八幡山古墳であるが、近年の発掘調査の成果により、そうした評価に対して、墳丘の構造と規模の観点から見直す意見が提示されている（藤井2005等）。これらを簡単に述べると、これまで一段目段築として墳丘の一部とみなされてきた最下段について、墳丘の付帯施設である「基壇」として捉え、二段築成の前方後円墳であると考えるものである。確かに『報告書』でも、墳丘最下段（『報告書』では「下段」と称する）について、「ほとんどくびれ部のしまっていない馬蹄形状を呈し」、「前方後円墳という形ではない」（森他1972、pp.47）と記述されるとともに、「基部」という表現も併用されていることから、「下段」が上・中段とは様相を異にすると認識されていたようである。今後、研究を進めるさいに留意すべき視点であろう。なお、井辺八幡山古墳を二段築成とした場合、墳丘長約 67 m・前方部幅約 43 m・後円部直径約 39 mとなり、同様に基壇を伴い二段築成として復原された大日山 35 号墳（墳丘長 83 m）（藤井2005）に比べ、墳丘規模は小さくなる。この評価が妥当であるかどうかは今後の検討課題であるが、すくなくとも墳丘からみれば、井辺八幡山古墳の従来の位置づけは検討を要する段階にあると考える。

2.3 井辺八幡山古墳と形象埴輪群研究

形象埴輪群の配置復原 井辺八幡山古墳が最も古墳研究に影響を与えたのが、東西両造り出しで検出された形象埴輪群であろう。十数年前まで関西の一地域の盟主墳とされる前方後円墳のなかで、形象埴輪群の様相が明らかになっている唯一の例であった。そのため、井辺八幡山古墳を検討対象とする文献は多く、ここでは到底すべてを扱えない。そこで、近年の井辺八幡山古墳の言及例からその扱われ方をみることにする。

一つは造り出し上の埴輪配置を復原し模式的に表示するもの（図3）。二つめは報告書から埴輪出土状況図をそのまま引用するもの（図4）。これら両例は、井辺八幡山古墳に限らず他の古墳の形象埴輪群を採り上げる場合にもよく認められる。しかし井辺八幡山古墳の場合、両例を比較すると到底同じ古墳の造り出しとは思えないほど異なった印象を受ける。特に前者の場合、その復原の根拠を個々の埴輪について明記しない限り第三者が検証することは難しい。

つまり、形象埴輪群を研究するうえで前提となる、造り出し上での埴輪配置に関する認識が、研究者により異なっているという点を認めることができる。この状況こそ、形

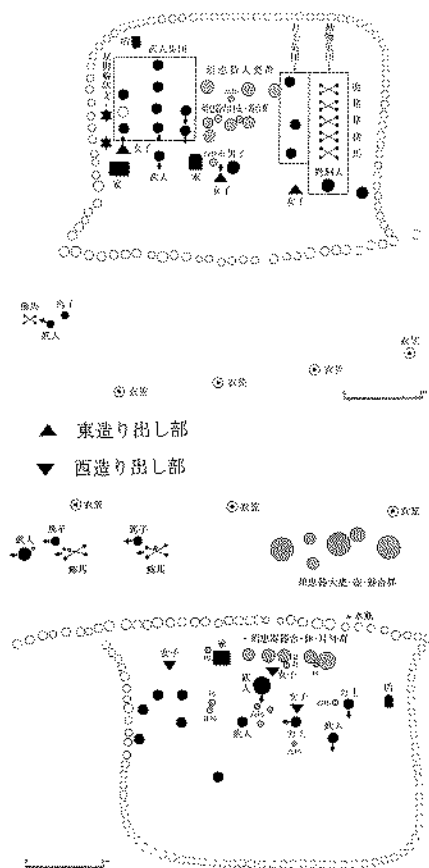


図3 若松良一氏による配置復原

象埴輪群の良好な資料という認識が研究者間にある一方で、資料として扱う場合に使用しづらいという意見が聞かれる原因の一つであろう。

形象埴輪群資料の増加 近年、大阪府今城塚古墳、宮崎県百足塚古墳、和歌山県大日山35号墳のように西日本各地においても、その地域を代表する前方後円墳から形象埴輪群が検出される事例が増えてきている。そのため、外堤や造り出しといった形象埴輪群が出土する位置の違いが明確になり、形象埴輪群に関するこれまでの研究成果も一部見直す必要に迫られているのが現状であろう。その結果、従来の井辺八幡山古墳の評価が再検討される可能性も十二分にある。

このように、発掘から約40年を経て井辺八幡山古墳を取り巻く環境は比較資料の増加という喜ばしい状況へと変化した。一方で現在の研究レベルで調査・報告される他の古墳例と、刊行後長い年月を経た『報告書』の成果を基に井辺八幡山古墳を直接比較することは決して有益ではない。少なくとも井辺八幡山古墳の資料を現在の研究レベルに立脚して再検討する必要がある、その上で他の古墳例と対比されるべきと考える。(関)

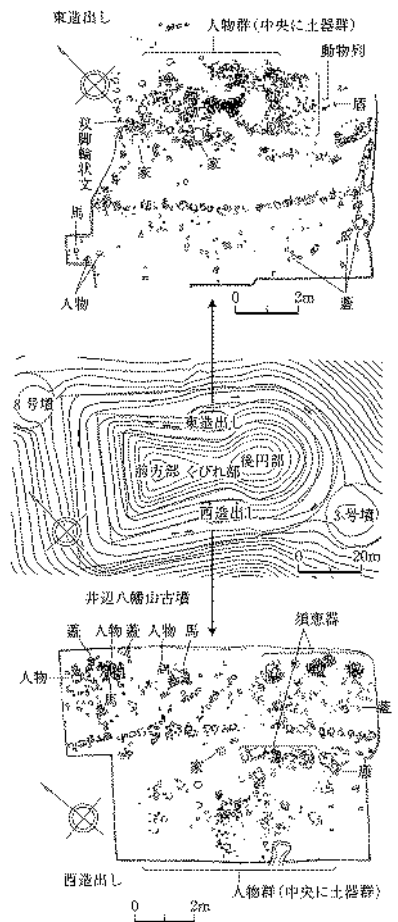


図4 青柳泰介氏による配置復原

3. 須恵器の検討

3.1 問題の所在

所属時期の再検討 井辺八幡山古墳の築造時期は6世紀前半と解釈する見解が一般的である。しかし、近年資料が増加しつつある古墳時代後期の他の造り出しと比較検討するためにも、筆者らは遺物の詳細な検討によって年代を決定すべきものとする。

検討の対象 井辺八幡山古墳の東西造り出しからは埴輪・須恵器・土師器が出土しているが、なかでも最も鋭敏に時期的な変化を示すと考える須恵器—中でも短い期間で変化する蓋杯・高杯類を中心に検討することが有効であろう。ただし、これらの器種は、ほぼ西造り出しのみから出土しているので、検討対象は西造り出しに限定されることになる。

森浩一氏による位置付け 須恵器については、森浩一氏が『報告書』のなかで検討し、所属時期についても言及している。森氏は出土須恵器の大半を自身の編年案(森編年)での第Ⅱ型式に相当し、それが古墳の築造時期であると考え、実年代を6世紀初頭においている(森他1972)。ただし、高杯には森編年第Ⅲ型式前半の特徴をそなえたものがあることを認め、これらの資料については「古墳の被葬者の埋葬およびその直後の葬儀に伴うものではない」と評価した。つまり、須恵器は新旧二時期

に分かれ、その中でも古い段階を古墳の被葬者の埋葬時期、新しい段階をその後、時期を隔てて行われた儀礼の時期と考えられたのである。

再検討の目的 『報告書』での位置付け以後、須恵器編年の深化がはかれるとともに、実年代観についても変化している。そこで今回の再検討の主な目的を、森氏によって時期差＝儀礼段階の差として捉えられた須恵器の新古二相がはたして時期差をして捉えうるものなのかどうか、という点を検討することに置いた。以上のような問題意識を踏まえ、主として田辺昭三氏らによる大阪府南部（陶邑）窯址編年などに準拠し⁽³⁾、井辺八幡山古墳出土須恵器を見直してみることにする。

3.2 出土須恵器の検討（図5）

杯蓋（1）は口径15～17cm前後で、天井部と口縁部の境に鈍い稜をもち、口縁部はなだらかに外反気味にのびる。口縁端部が凹面をなす例を基本とする。これらの特徴はTK10型式古段階の範囲内で捉えうるものである。杯身（2・3）は口径13～15cm前後で、受け部が外上方に短くのび、立ち上がりやや内傾気味に上方へのびる。端部は丸くおさめている。これらについても杯蓋同様TK10型式古段階の範囲内で捉えられると考える。しかし、これらよりも立ち上がりが短く、内傾した例も確認できる。これらは新しい傾向を示すものであり、TK10型式新段階に含まれる可能性が高い。高杯（4～7）は有・無蓋で脚部が比較的短い一段スカシ例が多いが、長脚例もある。長脚例には、①有蓋の一段スカシのもの（4・5）、②有蓋の二段スカシで下段に三角形スカシ・上段に方形スカシを穿孔するもの（6）、③有蓋の二段スカシで上下段ともに方形スカシを穿孔するもの、④無蓋の二段スカシで上下段とも方形スカシを穿孔するもの（7）がある。短い脚部のものや①など基本的にはTK10型式古段階に位置づけられるものが多いと思われるが、②の一部と③・④はTK10型式新段階に含まれると考えられる。

小結 以上の検討からは、大阪府南部（陶邑）窯址編年に基づくと西造り出しの須恵器はTK10型式古段階と同新段階に分かれることが判明した。この点において新旧二型式の存在を認めた森氏の指摘を裏付けることができたわけである。それでは、やはり森氏が解釈したように、これは時期差であり、井辺八幡山古墳では複数時にわたって儀礼が執行されたことを示すのであろうか。

3.3 周辺事例との比較検討

ここでは視点を変えて、周辺地域における同時期の資料との比較検討を行ってみたい。本来ならば紀伊地域の事例が最適であるのだが、当該地域には良好な資料を見出しがたい。次善の策として、大阪府南部地域の河南町一須賀古墳群の事例を取り上げることにしたい。一須賀古墳群は6世紀前葉から7世紀中葉にかけて造墓された大規模後期群集墳である。そのなかのWA支群22号墳ではTK10型式新段階に位置づけられる長脚二段スカシの無蓋高杯が、天井部と口縁部に鈍い稜をもち、ある程度の角度をもつ、またはたちあがり比較的長いなどTK10型式古段階の要素をもつ蓋杯に伴って、出土している（大阪府教育委員会1992）。WA-22号墳は横穴式石室墳であり、複数次の追葬の結果である可能性は否定できないものの、一つの木棺しか検出されていないことから、一括資料である可

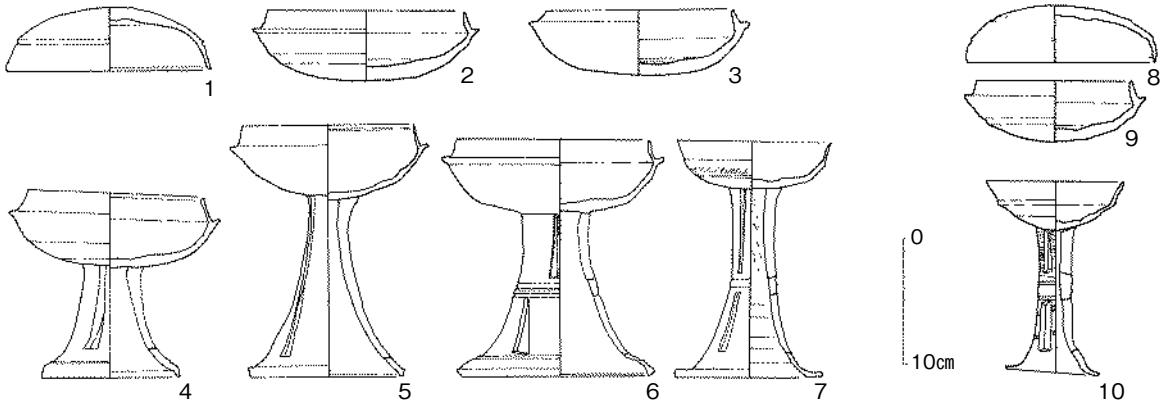


図5 井辺八幡山古墳西造り出しと石光山 26 号墳出土須恵器

能性が高いと判断される。

また、大和地域に目を向けると、後期の大規模群集墳である御所市石光山古墳群の木棺直葬墳である 26 号墳でも、TK10 型式新段階の長脚二段スカシの無蓋高杯と、TK10 型式古段階の要素をもつ蓋杯が墓壙内で共伴して出土している（図 5-8～10）。これはその出土状況から一括資料であることは間違いないだろう。

3. 4 検討の結果

以上の事例からは、少なくとも TK10 型式古・新段階が伴って出土した事例のなかには、必ずしも時期差と捉えられない例があることが分かる。このような事例の存在を考慮すると、井辺八幡山古墳西造り出しから出土した須恵器群について、森氏が解釈したように時期差とみなすのではなく、1 時期の一括資料として捉える余地があると考えられる。その場合、須恵器からみた所属時期は TK10 型式古段階から同新段階への移行期と解釈するのが妥当であろう⁽⁴⁾。なお、東造り出しにおいても、数量的には乏しいものの西造り出し出土品に類似した高杯片が出土している。以上から、井辺八幡山古墳の所属時期は TK10 型式古・新段階にまたがる移行期にあたり、その実年代は 6 世紀中葉頃と考えることができた。

(清水)

4. 埴輪の検討

上記のように、『報告書』刊行以後、本古墳の資料群がもつ価値は、時代の変化とともにかわってきた。調査の精度やデータの採り方等、今日からみれば幾分かの不備がある事はいうまでもない。形象埴輪に限ってみても全容が分かる程度に復原された個体は、調査で確認された個体数の五分の一にも満たない。そのような様々な要因が、当古墳の埴輪群の様相をわかりにくいものにしてきたようである。今回我々が原因から検討し、採り上げられた埴輪をひとつずつ詳細に観察したところ、『報告書』ではまとめきれなかった重要なデータが残されている事が分かった。

本古墳の人物埴輪は、一般に言う正装・武装男子、女子（巫女・采女）、力士、馬の口持ち（馬飼、

馬子)等の種類に分類される⁽⁵⁾が、これらはその部位(頭、胴、腕、足、装備、持物など)の形状や表現方法に一定のルールがあり、各部位の特徴からその種類を特定することができる。また調査が造り出し全面にわたっている事、その基部のほとんどが原位置で残存していた事、10分の1縮尺の詳細な出土状況図と書き込み、調査日記の詳細なメモ、埴輪自体への注記が残されている事などから、埴輪のもつ位置情報をかなりの部分で復原できる事が分かった。

そこでまず、原位置で確認できた形象埴輪の基部について、遺構原図・写真と注記をもとに、記載された破片の大きさ、形状と特徴、位置関係から、各々の透孔の開口方向と埴輪の向き(人物の場合、脚先の向き)を検討する事から始めた。次に、出土した埴輪の部位をもっとも近い距離にある基部に帰属させて検討し、胎土・色調・焼成・製作技法の差異などを含めて再検討したうえで部位の帰属先を絞り込み、部位群が組み合わさる形象埴輪の形状を推定復原することにした。

なお紙面の都合上、出土した埴輪のすべての実測図・写真を掲載することはできないため、検討成果を図6・9及び表1・2に記載した。表の番号や部位の個体番号は、『報告書』の実測図・写真や、資料に残された注記とあわせて参照しやすいよう、旧番号もあわせて記載した。適宜参照しながら本報告を読み進めていただきたい。

4.1 西造り出し(図6～8・表1)

人物1 ほぼ全容がわかる程度に復原された個体である。基部側面の透孔は墳丘の主軸に直交し、靴を履く立脚の形状を残す。脚先は前方部に向けて設置されていた。なお、復原はされていないが、顔(ニ)とした耳の破片が頭部に、胴(ハ)とした結び目のある破片が脚部にそれぞれ帰属する可能性がある。

人物2 基部側面の透孔は墳丘の主軸に平行し、その上部に立脚の素足が残っていた。素足の指先も残り、墳丘外側を向く。この基部の南50cmに、膝廻りに突帯を巡らす脚部が出土しており、基部に接合している。素手の腕(ヘ)(ヲ)がこの人物に帰属する可能性が高い。付近(D区)でみつかったふんどし、あごひげ、形象(ニ)の扇形マゲもこの人物に帰属すると考えてよい。

人物3 基部側面の透孔は四方向に開き、墳丘の主軸に平行する大きなもの(径4～4.5cm)が二つ、直交する小さなもの(径2cm)が二つある。墳丘外側に向けて二対のヒレ状突出部が付帯する。このヒレ状突出部は、『報告書』の段階ではこれが反対(墳丘内)側にも付帯していたのかどうか不明であったが、今回の検討にあたり、「人物6号」として整理されていた袋の中から接合する基部の破片が見つかった(図7)。これにより、ヒレ状突出部は墳丘外側に向けてのみ存在することが判明した。このヒレ状突出部は、立脚とも無脚とも異なる下半部の表現である。

『報告書』ではこの人物にB区の靴(ハ)(ニ)が付属する可能性を指摘しているが、先述のように立脚で靴を履く形状とは考えられない。周囲には、基部からそのまま落下した状態で、腰のあたりで段状のくびれをもつ草摺(イ)、柄部を墳丘外側に向けて出土した刀(イ)がある。これを装着状況の反映とみれば、この人物が墳丘外側を向いていたと判断される。上半部の状況は不明であるが、付近で出土した手甲のある右腕(チ)(リ)(ヌ)が、後述の人物6か、この人物に伴う可能性がある。

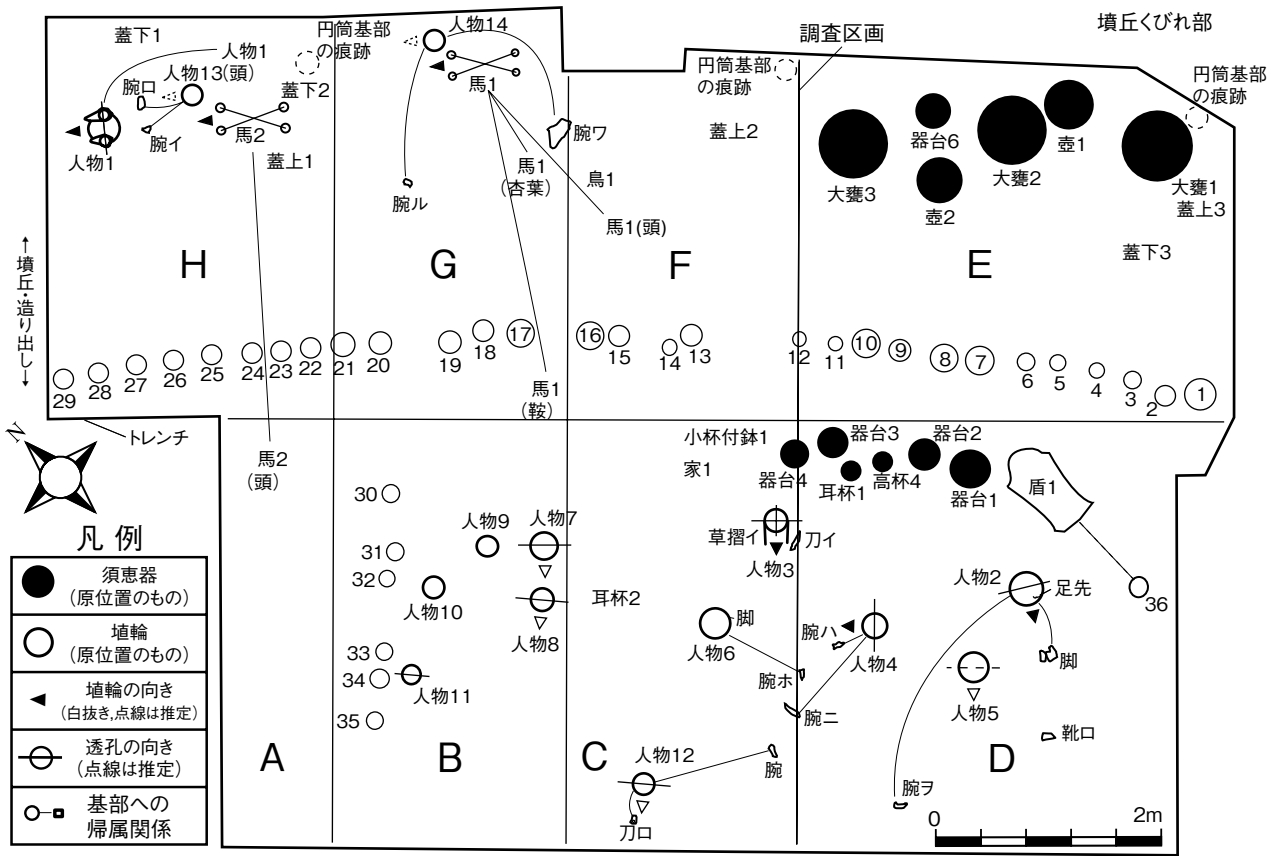


図6 西造り出し平面図

表1 西造り出し人物埴輪 (一部の象形埴輪を含む)

番号	地区	基部径(cm)	原位置	透孔(墳丘主軸に対し)	下半部	向き	帰属する部材	基部と部材との距離
人物1	H	26	○	ほぼ直角	立脚・靴 (両脚残存)	北西 (前方部)	顔 (ニ) 胴 (ハ)	付近
人物2	D	30	○	ほぼ平行	立脚・素足 (左足残存)	南南西 (墳丘外)	腕 (ヘ) 腕 (ヲ) ふんどし・あごひげ 西形象 (ニ) マゲ	造り出し内 南西2m 付近
人物3	C	22	○	4方向 (大きな透孔は墳丘主軸に平行)	ヒレ状突出部有	南西 (墳丘外)	草摺 (イ) 刀 (イ)	近接
人物4	D	23	△ (南西に倒れた状態)	直角	立脚・素足 (左足残存)	北西 (前方部)	腕 (チ)(リ)(ヌ) 手甲・右 腕 (ハ) 玉巻き 腕 (ニ) 玉巻き 皿状土製品 形象 (ヲ) 袈裟状衣 人物 (ハ) 顔	西造り出し内・C区 西10cm 西70cm 付近 C区 「人物4台付近」
人物5	D	28	○	不明	靴	南西 (墳丘外)か	草摺 (ニ) 靴 (イ) 右脚 弓をもつ人物の上半部	D区 40cm C・D区ほか
人物6 (旧人物A)	C	28	○	不明	立脚	不明	立脚の一部 人物 (ロ) 胴部 腕 (チ)(リ)(ヌ) 手甲・右	東南接 C・D区 西造り出し内・C区
人物7 (旧円筒B)	B	28	○	平行	不明	南西(墳丘外)か		
人物8 (旧円筒C)	B	26	○	平行	不明	南西(墳丘外)か		
人物9	B	20	○	不明	不明	不明		
人物10 (旧円筒D)	B	22	○	不明	不明	不明		
人物11 (旧円筒E)	B	20	○	平行	不明	不明		
人物12 (旧円筒F)	C	22	○	平行	不明	南西(墳丘外)か	刀 (ロ)	南15cm
人物13	H	21	○	直角か	無脚	北西 (前方部) か	顔 (イ) 胴 (ロ) 腕 (イ) 腕 (ロ)	H区 H区 西60cm H区
人物14	G	22	○	直角か	無脚	北西 (前方部) か	顔 (イ) 腕 (ヲ) 腕 (ル) 腕 (ト)	H区 南1.2m 南西1.2m 造り出し内
円筒36	B		○	不明		後円部-墳丘外	盾1	北70cm

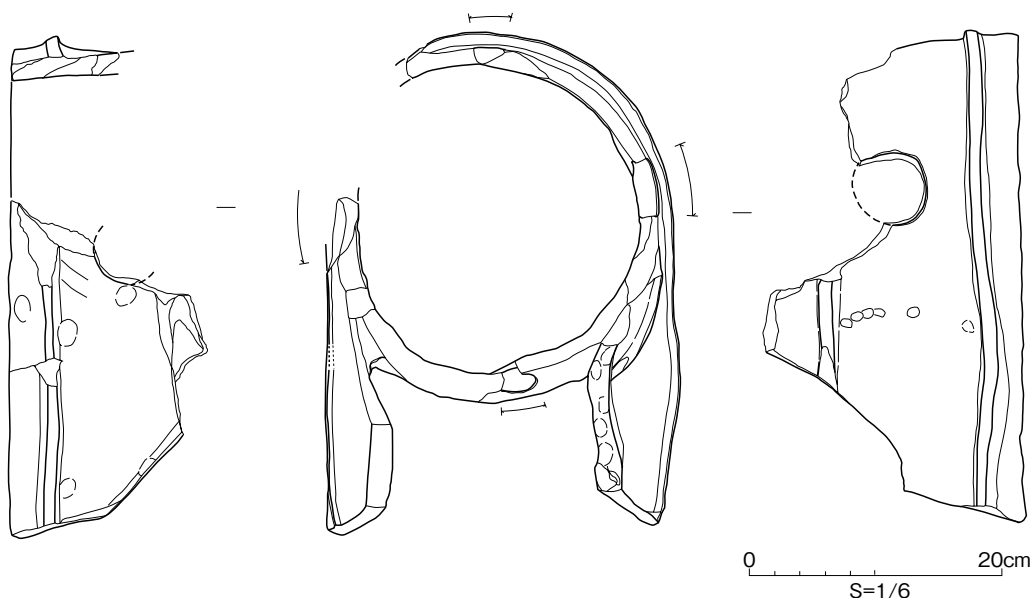


図7 人物3 基部

人物4 基部はほぼ半分が残存し、墳丘外側に向かって倒れた状態で出土している。そのまま原位置に戻すと、基部側面の透孔は墳丘の主軸に直交する。その上部に立脚の素足の表現が残存していたので、素足の先は前方部側を向く事になる。腕(ハ)は玉巻き(腕飾り)表現のあるもので、手のひらは指先を表現せず、何かが貼り付く表現である。同様に玉巻きの腕(ニ)がこの人物に帰属するとみてよい(なお『報告書』では、腕(二)が「C区器台4の南から出土」とあるが、出土状況図では人物4の基部から西に70cm離れた位置に図示されている。また原図でも同様の地点に図示されており、出土状況図の方が正しい)。

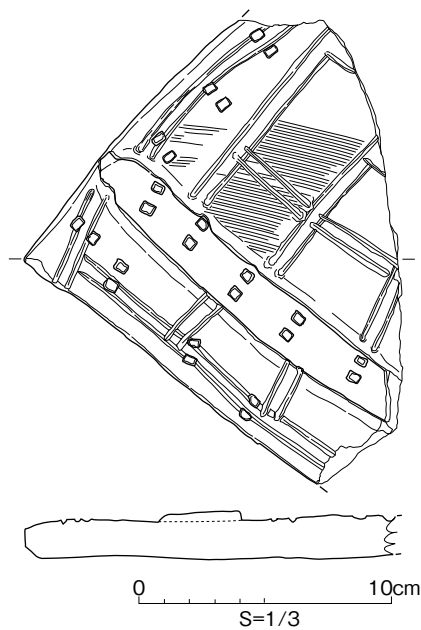


図8 人物4 袈裟状衣

この両腕の手のひらに貼り付いていた対象物は現在のところ不明であるが、この人物に近接して

出土している方形の皿状土製品(孔のあいた蓮根状の土製品がその上へのせられている)がその第一候補である。また、この人物の「台付近」で出土した人物(ハ)とされる顔は、髪を後ろに束ねた「板状結髪」と、小さな付着物(耳か)の痕跡、顔の廻りを円形に巡る「顔面環状入墨」の表現をもつ。この入墨は現在分かっている井辺八幡山古墳の人物埴輪では唯一の表現である。なお、C区で出土した形象(ヲ)は「馬甲の可能性はある」と報告されたものだが、我々は「袈裟状衣」(図8)の一部と判断した。今のところ、この袈裟状衣が帰属する可能性はこの人物に限られる。

人物5 基部側面の透孔が一部残存するが、原位置での向きについては記録がない。ただし『報告書』では「向きは造り出し外側（南西）方向の可能性が高い」と記している。この基部の周辺からは、草摺（ニ）、右脚の靴（イ）、挂甲をつけ鞆を背負い左手に弓をもつ人物の上半部と、弓の破片が出土している。なお、南に60cm離れて出土している靴（ロ）はこの人物の靴とは別個体で、より西側に位置する人物群像の一部から二次的に移動したものと考えておく。

人物6 基部側面の透孔は残存せず、向きは不明である。原図で確認すると、南東側に倒れ込んだ状態で立脚の一部が出土している（ただし復原はしていない）。付近では、玉類の首飾りと全身に革綴じ表現のある、腕を突き出した左肩が残る人物（ロ）が出土している。また先述の手甲の右腕（チ）（リ）（ヌ）のいずれかがこの人物に帰属するとみてよい。

人物12 基部側面の透孔は墳丘の主軸に平行する。下半部の形状は不明であるが、この埴輪の南で刀（ロ）が出土している。なお、C区でこれまで検討した人物埴輪にあてはまらなかったものとして、矢筒（イ）、草摺、指先表現のない腕（ホ）、靴の破片といった部材が多く残されており、消去法的にこれらの部材のいくつかがこの人物に伴う可能性もある。

人物13・14 基部側面の透孔は高い位置に空けられ、脚の表現がなく、スカート状の部位がとりつき、胴部に至る。向きや形状は原図や基部自体では判断がつかないが、後述する馬形埴輪との関係から、前方部を向いて左手を挙げていた可能性は高い。人物13には「鼻上翼形入墨」を施した顔（イ）、綾杉文の帯を表現した胴（ロ）、腕（イ）（ロ）が伴う可能性がある。人物14には、「鼻上翼形入墨」を施した顔（ロ）と、革帯と結び目を表現した胴（イ）が伴う可能性がある。腕（ワ）は顔の首筋の部分から襟、左肘にかけての部位で、袖口に革帯表現があり胴（イ）と共通する。腕（ル）は釧をはめた左手で何かを握る。右手先にあたるのが、胎土の観察からも腕（ト）と推定される。また両者の頭部には、「棒状小結髪」が伴うと考えるとよい。

馬形埴輪 二個体確認されている。馬1・2ともに、四脚および胴部が原位置から南西方向に倒れた状況で出土している。馬1は、鞍・鐙の一部が南西に2m離れた円筒埴輪列の外側で出土しているが、頭部、杏葉は南にそれぞれ1m、30cm離れたところから出土している。馬2は馬1ほど復原できる部材がそろわず、頭部が南西に2.5m離れた円筒埴輪列の外側に集中して出土している。復原される向きはどちらも西北西方向（前方部からやや墳丘外に振った方向）である。

鳥形埴輪 馬1の南1mの地点で、鳥（鶏）の頸部が出土している（原図には記載がなく、『報告書』の出土状況図には後日記録メモなどから追加されている）。原位置は不明であるが、円筒埴輪列より墳丘側と推定できる。なお、鳥の頸から胴部にかけてと考える事ができるのは、F区の墳丘裾付近で出土した「大型脚付鉢」と報告されているもの（直弧文が崩れた沈線を施し卵形をなす形状）と、G区円筒18付近で出土した「入墨のある腕（カ）」と報告されたもの、およびB区出土の鶏冠（とさか）の可能性のある形象（ヌ）である。

家形埴輪 原位置は不明。家1は、屋根の破風と棟先の一部が人物3の北側で出土し、そこから南西に1.5m離れた人物6西側で棟先の一部が出土している。その特徴から入母屋の平屋建物と推定される。また、人物6の東に接して、『報告書』では「不明埴輪」とされていた「棟持柱」を表現した

西形象（イ）（ロ）（ハ）が出土している。家1とは別個体と考えられるものである（本報告では新たに家2としておく。今城塚古墳の例から判断すると、入母屋の高床建物になると想定される）。なおこれらの家形埴輪は、造り出し上に基部の痕跡が確認できない。家1の屋根の破風がみつかった周辺をみると、円筒埴輪列をこえて墳丘内から造り出しに流れ込んだ先述の馬の部位（鐙・鞍の一部）も確認できるため、家1・2については、これらの部材と同様、墳丘内から流れ込んだ部材である可能性も考えておきたい。

盾形埴輪 盾1はほぼ輪郭がわかるかたちで、盾面を上にして検出されている。出土状況から、南側付近に基部があった事や、盾面がほぼ南側に向けて（後円部から墳丘外に向けて）設置されていた事がわかる。その方向に位置する円筒36は、周囲に列をなさず独立して樹立されていることから1号盾の基部となる可能性が高い（なお、破片として出土している盾2は、上記の出土状況を勘案すると、C区南西部に樹立されていた「人物11」基部に帰属する可能性がある）。

蓋形埴輪 確認できたのは4個体である。墳丘前方部から順に、報告書の番号にそって蓋1（人物13の北側30cm付近）、蓋2（人物14付近）、蓋4（大甕3付近）、蓋3（大甕1付近）とする。「墳丘上からの転落」と報告書では結論づけられているが、原図をみるとそうとも言い切れないところがあるので触れておきたい。原図では、馬2東側、大甕3の北側、大甕1東側、の三箇所比較的大きな円筒埴輪片の集中が確認できる。いずれも円筒部の基部が残っているわけではないので断言はできないが、当該地点で円筒埴輪の樹立が考えられない事からも、これらの円筒部を蓋の基部と考えたい。したがって現状では、蓋の配置について、墳丘上からの転落の可能性を残しながら、調査区内で等間隔に、すくなくとも三個体分が墳丘裾に据え置かれていたという二つの可能性を考慮し、類例の増加を待ちたい。

4.2 東造り出し（図9～11、表2、写真1～3）

人物1 基部側面の透孔は墳丘の主軸に平行し、脚の部位は残っていないが、南西側にゆるやかな立ち上がりを残す基部頂部の形状や、その上面の脚の剥離面の観察などから判断して、この人物埴輪は墳丘側を向いていたと推定される。帰属するとみられる部位は腕（ハ）（イ）と、素足の右足先（イ）がある。腕（イ）（ハ）はいずれも玉巻きの表現で、指先は表現されていない。

人物2 基部側面の透孔は東南東を向き、墳丘の主軸に平行しながらわずかに後円部側に傾き、靴を履く立脚の形状をよく残している。脚先は、南南西（後円部）に向いている。帰属するとみられる部位には、付近で出土した草摺の胴（ハ）、挂甲の破片、腕（ロ）とバチ形土製品の形象（ツ）、バチ形土製品を握る腕（ニ）、刀（ハ）がある。

人物3 基部側面の透孔は墳丘の主軸に平行し、靴を履く右脚の部位からこの人物が墳丘側を向いていた事がわかる。帰属するとみられる部位は、腕（ム）と、弓がはがれた腕（ヘ）、挂甲の一部、顔の破片がある。弓（ハ）もこれに帰属する可能性がある。

人物4 基部側面の透孔は大小あわせて四方向に開く。大きな透孔（推定径4～4.5cm）は東南東を向き、墳丘の主軸に平行しながらわずかに後円部側に傾く。小さな透孔（径約2cm）はそれに直交

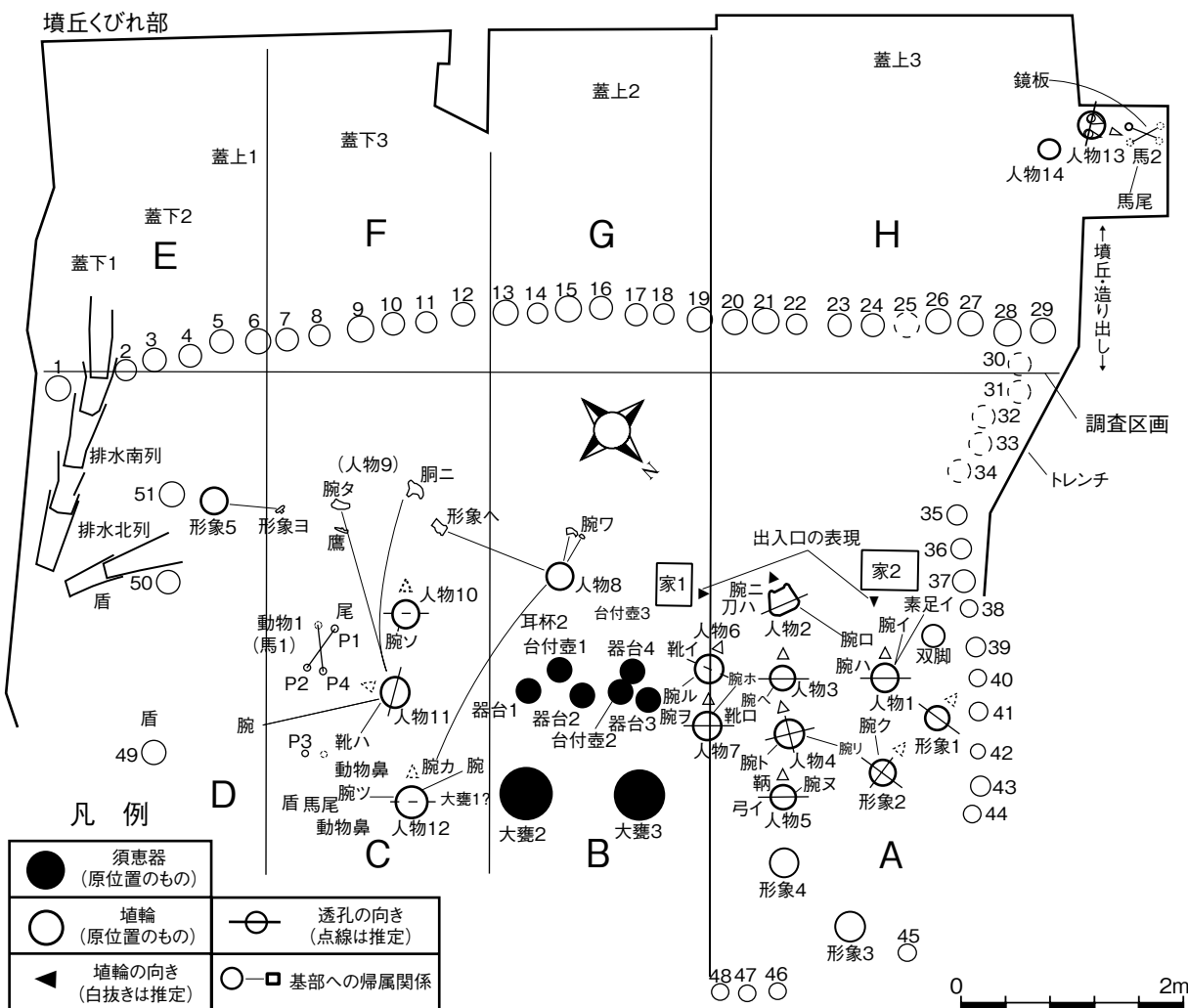


図9 東造り出し平面図

する。脚先の方角は不明であるが、透孔や周囲の状況から南南西（後円部側）を向いていたと推定できる。帰属するとみられる部位は、手甲に円棒がつく右腕（ト）、弓をもつ腕（リ）と、挂甲の一部、冑の破片がある。東側に筒状表現のある器物（盛矢具か）が出土している。

人物5 基部側面の透孔は墳丘の主軸に平行し、脚の部位は残っていないが、基部頂部の形状から判断して、この人物埴輪は立脚で墳丘側を向いていたと推定される。帰属するとみられる部位は、長袖の腕（ヌ）と鞆がある。弓（イ）も南側に接して出土している。

人物6 基部側面の透孔は二箇所が開くが、原位置の方角については記録がない。原図で検討した結果、透孔が南南東を向き、墳丘の主軸に平行しながらわずかに前方部側に傾くと考えた。よって残っていた靴の左脚先の方角は、東を向く事になる。帰属するとみられる部位には、靴（イ）、胴（ト）、長袖を表現したバチ形土製品を握る腕（チ）（ル）がある。またA・H区から出土した胴（口）も、消去法的にこの人物に帰属する可能性がある。

人物7 基部側面の透孔は墳丘の主軸に並行し、靴をはいた右脚の部位が残り、立脚で墳丘側を向

表2 東造り出し人物埴輪（一部の形象埴輪を含む）

番号	地区	基部径(cm)	原位置	透孔(墳丘主軸に対し)	下半部	向き	帰属する部材	基部と部材との距離
人物1 (旧形象8)	A	27	○	平行	不明	南西(墳丘)	腕(ハ)玉巻き	南15cm
							腕(イ)壺付・玉巻き	西30cm
							素足(イ)右	西65cm
人物2 (旧形象3)	A	28	○	ほぼ平行 (東南東)	立脚・靴 (両脚残存)	南南西 (墳丘)	胴(ハ)楕円形草摺	人物2号付近
							圭甲の一部	東15cm
							腕(ロ)右・土製品剥離痕有	北60cm
							形象(ツ)バチ形土製品	人物2号付近
							腕(ニ)バチ形土製品を握る・左	西20cm
刀(ハ)	南東30cm							
人物3 (旧形象4)	A	23	○	平行	立脚・靴	南西(墳丘)	腕(ム)右・手甲	人物2号付近
							腕(ヘ)左・弓の剥離痕	東35cm
							挂甲の一部	東南接
							顔の一部	東南20cm
人物4 (旧形象5)	A	24	○	4方向。大きな透孔はほぼ平行(南南東)	不明	南南西 (墳丘)か	腕(ト)右・手甲に持物	東南15cm
							腕(リ)左・弓をもつ	西20cm
							挂甲の一部	西25cm
							筒状器物(盛具か)	西接
							胄	東接
人物5 (旧形象6)	A	25	○	平行	立脚	南西(墳丘)	腕(ヌ)右・長袖	東接
							鞆	南西近接
							弓(イ)	南接
人物6 (旧形象11)	A・B	31	○	南南東 (ほぼ平行)	立脚・靴 (左脚残存)	西南西 (墳丘)	靴(イ)	南接
							胴(ト)首周辺	靴(イ)下部
							腕(チ)右・バチ形土製品を握る・長袖、胴の剥離痕	人物3号付近
							腕(ル)バチ形土製品を握る長袖	東南接
							胴(ロ)?	A・H区
人物7 (旧形象15)	A・B	26	○	平行	立脚・靴 (右脚残存)	南西(墳丘)	靴(ロ)	西接
							腕(ホ)右手首	西50cm
							帯	北接
							腕(ヲ)弓を支える 左手?	南接
							弓(ニ)	付近
							弦(イ)~(ハ)	付近
人物8	B	30	○	不明	立脚・素足	不明	腕(カ)玉巻き	北西30cm + C区
							腕(ワ)玉巻き	北西30cm
							形象(ホ)板状結髪	B区6号人物埴輪東
							素足・右	9号人物付近
							形象(ヘ)袈裟状衣	東1.5m
人物10	C	26.5~31	○	平行か	立脚・素足	南西 (墳丘)か	腕(ソ)	東20cm(接合)
							素足「わらじ」左	人物11号付近
人物11 (旧形象13)	C	29	○	ほぼ直交 (東北東)	立脚・靴	南南東	腕(タ)長袖左 付着痕残す	南西1.5m
							胴(二)右手・長袖	南西1.5m
							鷹形土製品	南西1.4m
							肩甲	南接
							人物頸	南接
靴(ハ)	東40cm							
人物12	C	29	○	平行か	立脚・素足	南西 (墳丘)か	腕の一部	西北西60cm
							腕(ツ)	南50cm
							形象(ヘ)扇形マゲ	人物11号付近
							ふんどし	人物11号北側
人物13	H		△(ほぼ原位置か)	ほぼ直交 (東北東)	立脚・靴	北北西 (ほぼ前方部)	腕(ウ)左手先	人物14号付近
							胴(イ)あるいは(ロ)	A・H区
人物14	H	20.5~24	○	不明	無脚	不明	腕(ノ)	H区
							腕(オ)	H区
形象1	A	22	○	北北西		不明	2号双脚輪状文の部材か	
形象2	A	26	○	北北西か	不明	不明	腕(ク)玉巻き	南西30cm
							腕(ラ)容器を捧げる左手	造り出し内
形象3 (旧形象12)	A	21	○	不明	不明	不明		
形象4		23~26	○	不明	不明	不明		
形象5	D	22	○	不明	立脚・素足	不明	素足(ロ)左	C区
							素足(ハ)	C区
							形象(ヨ)壺を抱える玉巻きの両手	南西30cm

いていたと推定される。帰属するとみられる部材は、靴（ロ）、腕（ホ）、帯、弓を握る腕（ヲ）、弓（ニ）がある。

人物8 基部側面の透孔は二箇所にあけられているが、原位置での方向については記録がない。原図で検討したが、結局確証が得られなかった。帰属するとみられる部材は、玉巻きの腕（ワ）（カ）と、「板状結髪」の形象（ホ）、後述する「人物9付近」で親指だけが残る足先（写真1）が出土している。

なお、腕（カ）の上腕部は人物12の南側でも出土し、両者が接合している。壺等の器物が手のひらに張り付いていたようである。また革紐で留めた刀子表現のある「袈裟状衣」の形象（へ）（図10）も、この人物に帰属する可能性が高い。

人物9 基部は残っておらず、原位置は不明。付近には付着痕を残す指先表現のない腕（タ）、手甲を右手につけた長袖の胴（ニ）、鷹形埴輪が出土している（以下は人物11の項で再度ふれる）。

人物10 基部側面の透孔は二箇所にあるが、どちらを向いていたか調査時の記録がない。『報告書』では、この人物の向きについて「例えば人物12号と向きあって取り組んでいた姿勢」と推定しているが、原図で検討したところ、透孔は墳丘の主軸に平行し、南西側（墳丘側）を向く可能性がある。

形状については報告書で詳細に述べられているが、腕（ソ）が接合し、立脚の人物に復原され、素足の右の指先が残存し、



写真2 付着物のある素足

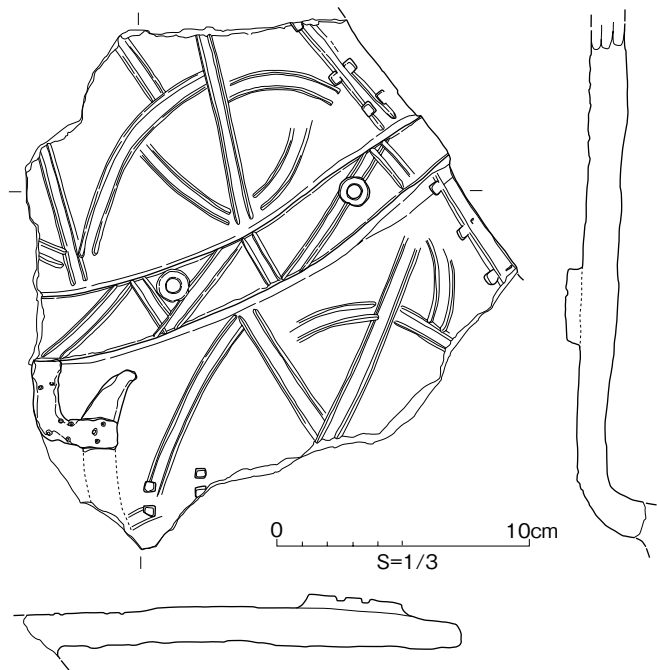


図10 人物8 袈裟状衣



写真1 素足の足先

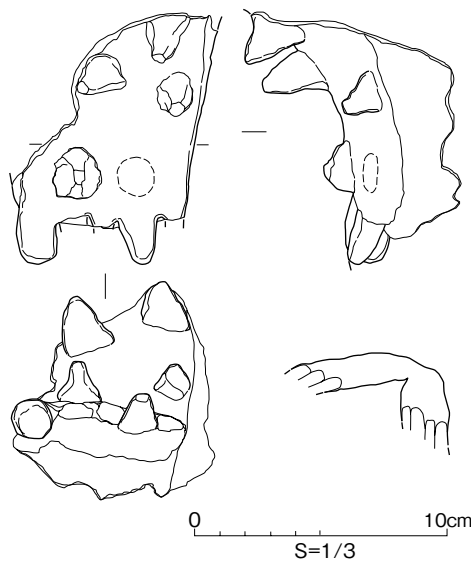


図11 付着物のある素足

右腿の部分を中心に残りがよい。ただし、左足先は確認されていない。後述の人物 11 と関連して整理されていた付着物のある素足（図 11 および写真 2）は、この埴輪の左足に該当する可能性がある。

人物 11 基部側面の透孔の向きについては調査時の記録がない。原図・写真での検討の結果、基部側面の透孔は東北東、埴輪の向きは墳丘の後円部方向となる可能性が高く、東造り出しで唯一南向きとなる。

帰属するとみられる部材には、肩甲、人物頸、靴（ハ）

がある。また、この人物の脚の一部とみられる棒状の表現が張りつく形象（ツ）は、人物 9・11 付近でみつかった部位が接合したものである（写真 3）。従来この埴輪は、人物 10 および後述の人物 12 に挟まれていること、付近で出土した〈付着物のある素足〉の存在からも「力士」と考えられがちであったが、上記の様相を考慮して、基部の不明であった「鷹形土製品」を伴う人物 9 の基部である可能性を考えておきたい。

人物 12 基部側面の透孔は二箇所にあるが、どちらを向いていたか記録がない。原図で検討したところ、透孔は墳丘の主軸に平行する可能性が高い。両素足の指先が残存する。復原した埴輪の向きが正しいとすれば墳丘側を向く⁽⁶⁾。帰属するとみられる部位には、腕（ツ）、形象（へ）の扇形マゲ、ふんどしがある。

人物 13 基部側面の透孔は西南西向きで、靴を履く立脚の形状を残す。脚先は、北北西（ほぼ前方部方向・墳丘外側）に向かうが、基部の下半部は出土した時点で既に欠損しており、基部の元来の位置からは移動していると考えた方がよい。調査区の拡張時に確認され詳細は未調査であるが、手甲の剥離した左腕（ウ）、胴（イ）（ロ）や H 区に散在する部位が帰属するとみられる。

人物 14 追加拡張調査で確認されたため、詳細は未調査である。復原された形状のほか、腕（ノ）（オ）、H 区の広範囲に広がる人物埴輪の部位、「棒状結髪」なども帰属する可能性がある。

双脚輪状文埴輪（形象 1） 双脚輪状文 1（以下、双脚 1）の基部は、埴輪への注記から透孔が北側に残っていたことが分かる。双脚部の部材は主として、付近の南から東にかけて散らばっていた。文様部分と基部の接合する箇所はないが、この基部は双脚にともなうと報告されている。

形象 1 は、双脚と並んで配置された円筒部で、原図でも周囲には帰属する部位が見当たらないが、当該地点（A 区）では双脚 1 とは別個体の双脚 2 が出土しているため、この形象がその基部に帰属すると考えておく。

形象 2 基部側面の透孔は大小あわせて四方向に開く。大きな透孔（径 4～4.5cm）は西南西を向き、墳丘の主軸より前方部側に傾く。小さな透孔（径 2～2.5cm）はそれに直交するかたちである。これは近接する人物 2・4 同様、人物埴輪基部の特徴である。帰属するとみられる部材は、玉巻きの腕（ク）、壺をもつ腕（ラ）がある。

形象 5 原図で確認したが方向については記録がないため不明。「形象 5」として整理されていた



写真 3 形象（ツ）

袋の中に、素足（口）（ハ）が含まれていた。これにより素足の立脚の人物の基部であることが推測できる。付近には、先述の人物9・12にともなう部位を除き、壺を抱える両手の形象（ヨ）、乳房表現の破片（原図のみ記載あり）が確認できる。

動物埴輪（馬形埴輪） 報告書では図示および説明を欠いていたが、今回の原図の再検討で動物の脚部（P1～P4）が、C区内の四地点に原位置で記録されていたことが分った。

P1：人物11の南50cm離れた地点。

P2：人物11の南。P1との距離は45cm。

P4：人物11の南。P1・P2と二等辺三角形を作る地点。P2との距離は20cm。

この3点がおそらく四脚動物（仮に動物1とする）の脚部となる。向きはほぼ東西方向となり、先述の人物11にその側面をみせるかたちになる。ただし頭部の方向は東か西向きか不明である。

P3：P1・P4の延長ライン上にある。P2との距離は80cm。また原図では、P3の西20cmの箇所にもう一つの脚の痕跡を点線で復原している（この二つの痕跡を仮に動物2とする）。

この脚群を『報告書』のように「馬（馬1）」とみるかどうかであるが、P3の20cm北で馬の尾・鈴が出土しているのに対し、P1・2・4では周囲に馬の部位がみつかっていない。

また、犬・猪の可能性のあるものとして、巻尾が二個体（P1に接して出土した『報告書』163図のもの、P2南で出土したもの）、鼻孔の大きく開いた鼻が三个体（P1・3間で出土）ある。また、『報告書』161図のたてがみが猪、H区出土の角状土製品が鹿と考えられるものである。

これらのことから、動物1・2を含めた動物埴輪群は、頭部の向きは不明としても、東南東方向、すなわち埴丘の主軸にほぼ直交するラインを基準に配置されていた事がわかる。その配列順はわからないが、馬、犬、猪、鹿がセットをなしていた可能性を指摘できる。また、先述のように人物11が鷹をともなう人物だとすれば、この一画に人物・動物埴輪群による狩猟表現の情景が復原できることになる。なお馬2の詳細は未調査。二脚が確認されている。南東に50cm離れて馬の尾、南に40cm離れて鏡板が出土しており、この馬にともなう可能性がある。向きは不明であるが西造り出しの例から前方部（北西方向）を向くと考えておく。

家形埴輪 基部は家1が長軸38.5cm、短軸33cm。家2が長軸41cm、短軸33cm。基部のみが原位置を保って出土している。原図で検討したところ、家1は長軸を北西にあわせ、北東方向（前方部側・埴丘外側寄り）に出入口がくるよう設置されていた。家2は長軸を北東にあわせ、北西方向（埴丘外側・後円部寄り）に出入口がくるよう設置されていた。なお、A区内で出土した形象（口）（ニ）が接合し、入母屋の家の屋根にともなう棟持柱表現である事がわかった。既に復原された家形埴輪の様相からみて、形象（口）（ニ）が家1・2にともなわないとすれば、他の家形埴輪の存在を指摘できるが、いずれにせよ原位置は不明である。

盾形埴輪 円筒50の東に比較的大きな盾の破片が出土している。またC・D区で他に二点、盾の部材が確認できる。原位置は不明であるが、造り出しの後円部側に設置されていたとみてよい。

蓋形埴輪 四個体分がみつまっているが、いずれも基部が原位置では残っていない。西造り出しの様相を参照するならば、これらの蓋も、墳丘上からの転落と考えつつも、ほぼ原位置周辺（墳丘裾部）にかたまった状況で出土している可能性を考慮しておきたい。（松田）

5. まとめ

以上、調査の原データと検討の成果をもとに、図12では、造り出し上面の形象埴輪とその樹立方法、形状の復原案を提示した。これをもう一度整理すると以下ようになる。

西造り出しの人物埴輪は、おおむね墳丘主軸と並行方向に透孔をもつ基部を有し、ほぼ足先を墳丘外側に向けて設置していたようである。配置された人物埴輪には、立脚のものとして、正装とみられる人物、武装の人物（弓をもつ人物）、素足でふんどしをつける人物（力士）、袈裟状衣の人物（女子）があり、無脚のものとして、片手を挙げる軽装の人物（馬の口持ち）が確認できる。立脚ではない人物3は、その装備からみて「正装の中心人物」と想定できる。

東造り出しの人物埴輪は、西造り出しより埴輪の密集度が高く、情報量も豊富であり、その傾向をつかみにくいが、おおむね墳丘主軸と並行方向に透孔をもつ基部を有し、ほぼ足先を墳丘側に向けて設置していたようである。配置された人物埴輪は、立脚として、武装人物（弓・バチ形土製品をもつ人物埴輪）、素足でふんどし姿の人物（力士）、袈裟状衣をつけ、器物を捧げ持つ人物（女子）が確認できる。

今回の検討結果においては、研究史の項で示した若松良一氏の復原案のとおり、『報告書』では未詳であった女子人物の存在を東西造り出しとも確認する事ができた。ただし、若松氏の復原案とは異なる位置で、西造り出しに1体、東造り出しに4体の計5体を復原し得た事は、原データを基にした今回の検討の大きな成果といえる。なお、女子人物の「袈裟状衣」には複雑な線刻表現が採られ、頭部についてもいわゆる「鳥田髷」の髪型表現をとるものは確認できない。頭部表現で女子人物の候補となるのはすべて「板状結髪」であるが、これは力士にも採用されている髪型である。類例がみあたらない現状では、西造り出しの4号人物に帰属するとした入れ墨表現の頭部とともに、井辺八幡山古墳に特有の女子人物の髪型表現と積極的にとらえてよいのではないかと考えた。

帰属が明確でなかった東造り出しの鷹形埴輪については、武装人物と想定した東11号人物埴輪への帰属を想定した。このような人物埴輪はまだ各地でも類例が少ないため、この復原案をたたき台とし、今後の議論につなげることができればと考えた。

これら東西両造り出しの形象埴輪は、従来の指摘どおり、造り出し上面に「面」として展開する人物埴輪群と、円筒埴輪列を挟んで墳丘内側で「列」をなす人物・馬形埴輪群の二者に分ける事ができる。その樹立の方向には上述のような一定のルールを看取る事ができ、前者については埴輪の設置された向きが「南西方向」となる事を明らかにできた。これはいいかえれば、墳丘の「外」に向かって表象される西造り出しの情景と、墳丘の「内」に向かって表象される東造り出しの情景と、「列」として表象される前方部側の情景との違いである。

井辺八幡山古墳については、墳丘や主体部、年代観や須恵器の性格の問題など、今後さまざまな形

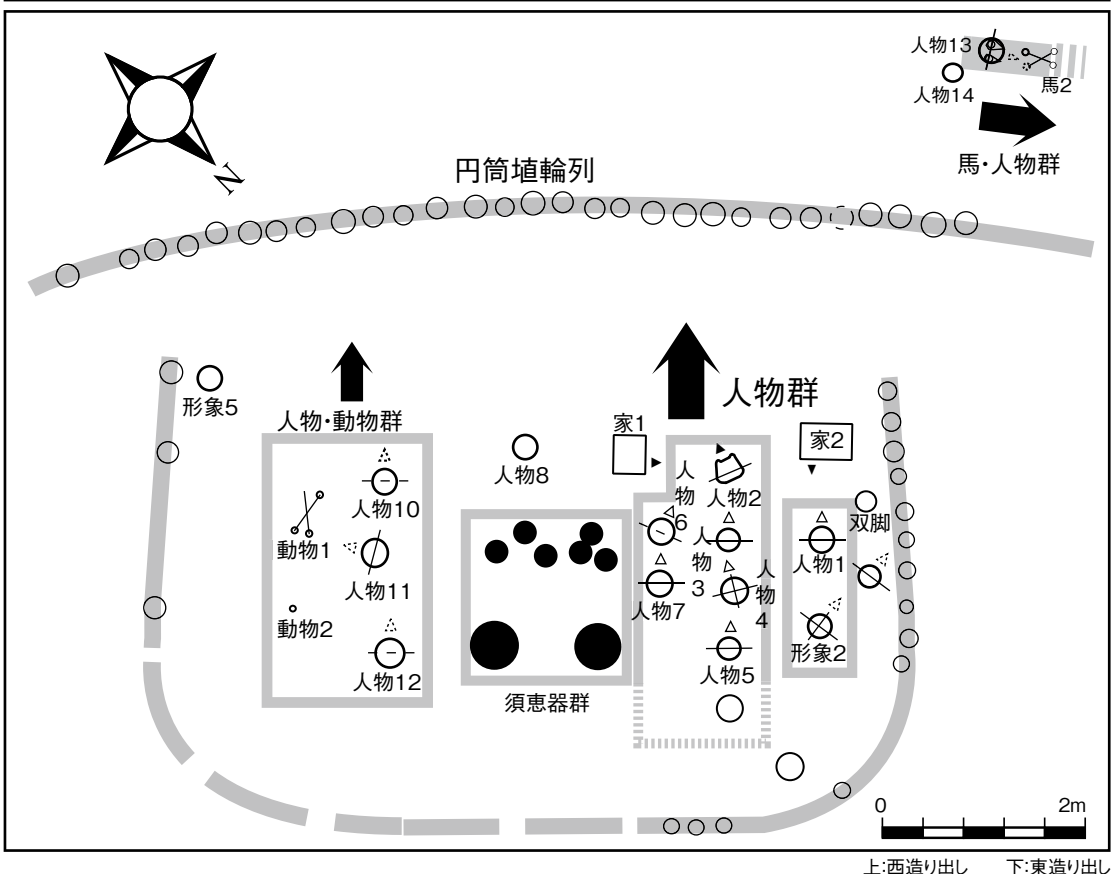
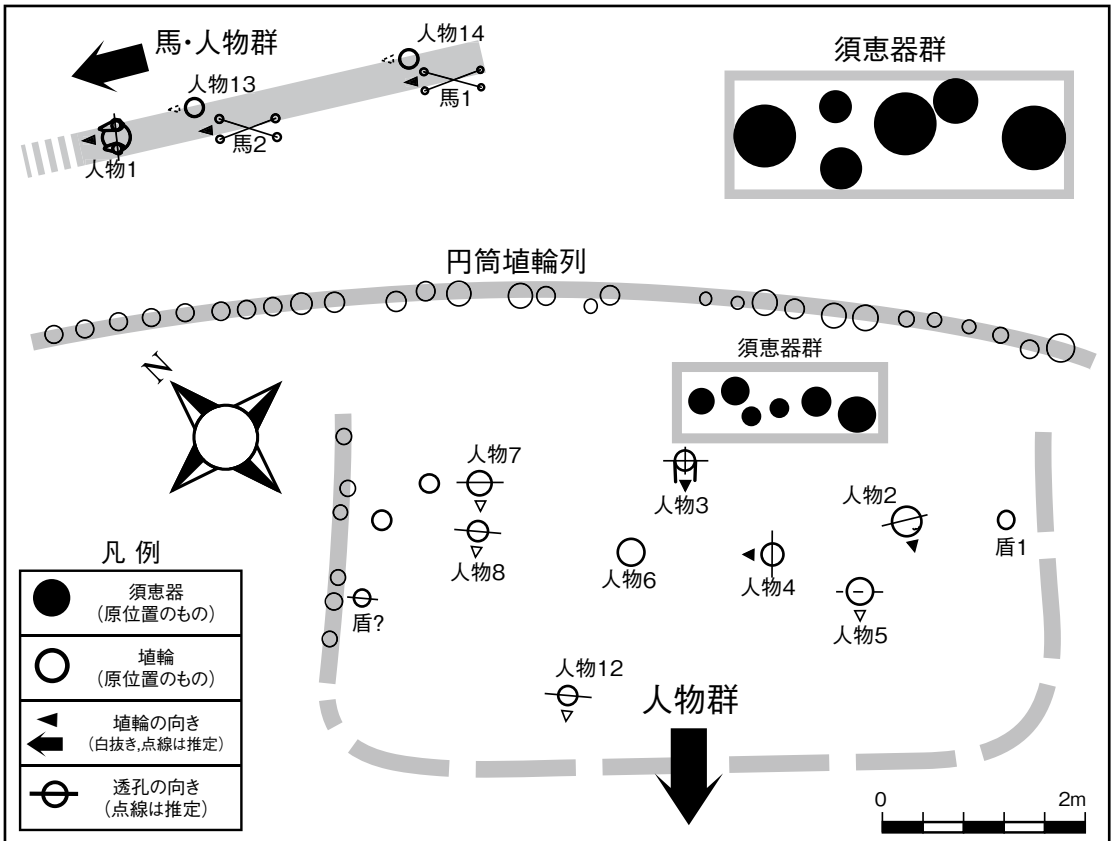


図12 東西造り出しの配置復原

で議論が進展してゆくものとするが、本報告ではまずその論点のひとつとして、形象埴輪群の配置復原に関する検討を中心に行った。この配置復原案がどれほど実態に近いものであるか、今後も検証を深めてゆく必要はあるが、本報告で、その配置の規則性と出土状況の詳細な様相を、ほぼつかむことができたとい々は考えている。

今回報告した須恵器の年代観を参照すれば、この埴輪配置が岩橋千塚古墳群内の造り出しにおける埴輪配置のなかでも、6世紀中頃に近い、もっとも完成された配置法である可能性が提起できる。東西造り出し埴輪群がもつ方向については、杉山晋作氏の指摘（杉山 2007）どおり、もっとも効果的に埴輪群が機能する場合を考慮すれば、須恵器の配列も含めた墳丘上での葬送儀礼や埋葬施設との位置関係、そこへ至る葬列との関係性を内在していると想定できるが、詳細な検討については今後の個別研究にゆだねる事としたい。形象埴輪が誰のために、葬送儀礼のどの段階で設置されたのか、活発な議論が行われて久しいが、すくなくとも本古墳の埴輪配置は、この回答に一定の手がかりを与えてくれるはずである。本会の活動は、1969年の調査で得られた資料を第一次調査の資料と考え、本格的な「第二次調査」が実施される日のために、この井辺八幡山古墳の研究を継承し、数十年間の考古学的蓄積を整理しながら、基礎的な資料をまとめておくことが目標である。本報告がその第一次調査の報告を補足するものと考えている。（松田）

【付記】 井辺八幡山古墳の埴輪資料を検討しようという話が出たのは、2005年12月のことであった。毎月の休日に歴史資料館に集い、実物資料を前にして議論を続けてきた。今回、なんとか本報告にこぎつけることができたのは、毎月我々のわがままにお付き合いいただいた同志社大学歴史資料館の辰巳和弘先生の御配慮によるものであることを明記して、厚くお礼申し上げたい。

また、現地調査参加者である前園実知雄さん、大野左千夫さん、浦壁万里子さんにはかつての調査当時の状況についてご教示をいただいた。松藤和人先生には木曜定例研究会での発表をご快諾いただき、研究会では参加者各位から有益なアドバイスをいただいた。また、紀伊風土記の丘資料館の丹野拓さんには、井辺八幡山古墳の比較資料として、整理中の大日山35号墳の埴輪資料を実見させていただいた。いずれの方々にも、この場を借りて厚くお礼申し上げたい。

そして、なによりも、我々が検討を重ねることができる土台を築いて頂いた森浩一先生にたいして、あらためて感謝を申し上げる次第である。

註

- (1) 井辺八幡山古墳出土資料として、同志社大学歴史資料館に現在、常設展示ほかの復原された埴輪・須恵器 88点およびコンテナ数に換算して 92箱の出土資料と、遺構・遺物実測図等が保管されている。
- (2) なお、今回の検討で、いわゆる朝顔形円筒埴輪の口縁部等を数点確認している。
- (3) 本来であれば、本古墳に須恵器を供給した窯、もしくは周辺遺跡から出土した須恵器をもとに組まれた編年を用いることが好ましいが、現状では良好な資料が少ない。そこで、次善の策として大阪府南部（陶邑）窯址群編年を用いる（田辺 1981、中村 2001、大阪府立近つ飛鳥博物館 2005）。
- (4) 森氏は『報告書』で新形式の須恵器は、西造り出し C 区の狭い範囲に限られるとし、埋葬より時期を隔てて行われた祭祀のあと、まとめて遺棄されたとした。しかし、一部の長脚二段スカシの高杯に「西 H」と注記されていることから、C 区以外でも新形式の須恵器が出土したと考えられる。これは、森氏の解釈にそぐわないが須恵器群を一括と考えた場合問題

はない。

- (5) 埴輪の分類については、基本的に塚田良道氏の業績（塚田2007）に準拠したが、片手をあげる軽装の人物、いわゆる「馬飼」という用語については不適切であると考え、本報告では「馬の口持ち」という表現を採用した。これに関しては同志社大学・中村潤子氏にご指摘をいただいた。
- (6) 調査時の原因には「外向きか」との注記もあったが、『報告書』もこの見解は採用していない。

参考文献（著者・刊行機関名50音順、刊行年順）

- 青柳泰介 2004 「埴輪配列論」『考古資料大観10』小学館
- 一瀬和夫 1992 『一須賀古墳群資料目録Ⅰ』大阪教育委員会
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2000 『一須賀古墳群の調査Ⅱ WA支群』
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2005 『王権と儀礼【埴輪群像の世界】』（平成17年度秋季期特別展図録）
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006 『年代のものさし』（平成17年度冬季期特別展図録）
- 大野嶺夫 1971 「明楽山山塊の古墳群について」『古代学研究』第62号 古代学研究会
- 大野嶺夫 1985 「岩橋千塚と周辺のT字形横穴式石室」『古代学研究』第109号 古代学研究会
- 大野嶺夫 1997 「九州系の諸要素を持つ岩橋型横穴式石室」『紀北考古学談話会会報』36 紀北考古学談話会
- 河内一浩 1987 「和歌山県における古墳時代中期の埴輪生産の様相」『花園史学』8 花園大学史学会
- 河内一浩 1988 「古墳時代後期における紀伊の埴輪生産について」『求真能路』（巽三郎先生古稀記念論集）同刊行会
- 河内一浩・土井孝之・三宅正浩・村田弘 1992 「紀ノ川流域の中期古墳一木ノ本古墳群を中心として」『考古学論集』4 考古学を学ぶ会
- 河内一浩 2001 「紀伊における埴輪の受容と拡散」『紀伊考古学研究』4 紀伊考古学研究会
- 河内一浩 2002 「和歌山県の円筒埴輪編年素描」『埴輪論叢』1 埴輪検討会
- 河内一浩 2003 「紀伊における円筒形埴輪の編年」『埴輪論叢』4 埴輪検討会
- 河内一浩 2003 「埴輪に見る後期岩橋千塚古墳集団の階層性」『紀伊考古学研究』6 紀伊考古学研究会
- 河上邦彦 1975 「紀ノ川流域における古墳文化の推移」『橿原考古学研究所論集 第三集』吉川弘文館
- 川口修身 2004 「紀伊における穹窿式横穴式石室の検討—和歌山市寺山古墳群の検討を通じて」『紀伊考古学研究』7 紀伊考古学研究会
- 川那部隆徳 1987 「人物埴輪配置の再検討」『滋賀史学会誌』6 滋賀史学会
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 日本考古学会
- 黒石哲夫 1990 「近畿の横穴式石室論・和歌山県」『横穴式石室を考える - 近畿の横穴式石室とその系譜』帝塚山考古学研究所
- 黒石哲夫 2003 「紀伊の渡来人—横穴式石室からみた渡来人の動向—」『日本考古学協会 2003年度滋賀大会研究発表資料』日本考古学協会 2003年度滋賀大会実行委員会
- 国立歴史民俗博物館編 2003 『はにわ—形と心—』朝日新聞社
- 白石太一郎ほか 1976 『葛城・石光山古墳群』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊）
- 菅谷文則 1976 「紀ノ川河口流域への古墳の伝統についての一考察」『横田健一先生還暦記念日本史論叢』
- 杉山晋作 2007 「人物埴輪の表現・情景そして効果場面」『《シンポジウム》埴輪の構造と機能 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 高橋克壽 2004 「埴輪まつりのうつりかわりと今城塚古墳」『発掘された埴輪群と今城塚古墳』（開館一周年記念特別展図録）高槻市立しろあと歴史館
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 千賀 久 1985 「紀ノ川下流域における古墳と渡来集団」『末永雅雄先生米寿記念献呈論文集』
- 塚田良道 2007 『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣
- 中司照世 2003 「岩橋型横穴式石室について—後期前半の首長墓の編年を中心に—」『紀伊考古学研究』6 紀伊考古学研究会
- 中村貞史 1997 「岩橋千塚古墳群の形成」『紀伊の国が光り輝いた時代—謎の古代豪族 紀氏—』（財団法人和歌山県文化財センター 設立10周年記念シンポジウム資料集）
- 中村浩 2001 『和泉陶器窯 出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版
- 坂靖・穂積裕昌 1987 「埴輪技法の伝播とその問題」『木ノ本釜山（木ノ本Ⅲ）遺跡発掘調査報告書』和歌山市教育委員会

- 富加見泰彦 1992「紀伊」『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社
- 藤井幸司 2005「大日山 35 号墳の調査成果」『日本考古学』19 日本考古学協会
- 藤井保夫・大野嶺夫 1992『日本の古代遺跡 46 和歌山』保育社
- 藤藪勝則 2002「岩橋千塚における形象埴輪配列について―人物埴輪出現期以降を中心として―」『紀伊考古学研究』5 紀伊考古学研究会
- 藤藪勝則 2003「紀伊における円筒形埴輪の編年」『埴輪論叢』4 埴輪検討会
- 藤藪勝則 2006「古墳時代後期における円筒形埴輪の様相―いわゆる紀伊型埴輪（環畿内南部型）埴輪について―」『紀伊考古学研究』9 紀伊考古学研究会
- 前田敬彦 1988「岩橋型横穴式石室の一特質・玄室内の埋葬形態を中心として」『兎原』芦屋郷土資料室 OB
- 前田敬彦 1993「和歌山県における横穴式石室の展開」『摂河泉文化資料第 42・43 号』摂河泉文庫
- 松下 彰 1988「岩橋千塚の理解によせて」『求真能路』（巽三郎先生古稀記念論集）同刊行会
- 松田正昭 1979「和歌山県における古墳時代後期」『和歌山県の研究』第 1 巻 清文堂出版
- 三宅正浩 1990「紀ノ川流域の五世紀の古墳をめぐって」『考古学論集』3 考古学を学ぶ会
- 森浩一・大野左千夫・伊藤勇輔・広瀬常雄・辰巳和弘 1972『井辺八幡山古墳』（同志社大学文学部考古学調査報告第 5 冊）同志社大学文学部文化学科
- 若松良一 1988『はにわ人の世界』（'88 さいたま博覧会協賛特別展図録）埼玉県立さきたま資料館
- 若松良一 2002「埴輪の地域性―紀伊の埴輪のあり方から考える」『研究紀要』17 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 吉田宣夫 1979「船戸山古墳群における多葬について」『和歌山県の研究』第 1 巻 清文堂出版

典拠

- 図 1 和歌山県教育委員会 1987『和歌山市所在 井辺前山古墳群とその関連遺跡』（広域遺跡群詳細調査 1）より転載。
- 図 2 森浩一他 1972 より転載。
- 図 3 青柳泰介 2004 より転載。
- 図 4 若松良一 1988 より転載。
- 図 5 森浩一他 1972 および白石太一郎ほか 1976 より再トレース。
- 図 6～12、表 1・2、写真 1～3 当検討会作成・撮影。